

映画上映会&ミニトーク 報告

【ミニトーク】

【演題】 “生きづらさ”を別の角度で見ると

～専門家ではないからできること～

【講師】 (一社)愛媛県摂食障害支援機構 代表

鈴木 ころろ さん

11月9日に開催した「映画上映会&ミニトーク」。誰もが抱える“生きづらさ”について、映画と関連付けながらお話いただきました。講演者として登壇した鈴木ころろさんは、高校生の時に摂食障害を発症し、26歳頃まで常に漠然とした不安や寂しい、辛いといった負の感情を抱えて過ごしていました。そしてそれらを上回る苦しみを感している間は負の感情に悩まずに済むを考え、物を食べ、吐くことで気分を紛らわせていたそうです。

しかしそんな生活を続けていると次第に体重は減り、体調も悪くなって引きこもりがちになり、友達をはじめとした身の回りの人と疎遠になっていきました。

幼少期から心の中にこびりつくように存在する「私は落ちこぼれた」「死にたい」という考えが助長する生きづらさは、就職した後に「社会のルールがわからない」「うまく物事に適応することができない」といった問題としてさらに悪化しました。しかしある日、それらの体験や気持ちを周りの人に吐露した際、共感し寄り添ってくれる人がいることに気づき、生きづらさを感じながらもどこか救われたような気がして前向きになれたそうです。

その体験をきっかけとして、2004年に自助グループ「リボンの会」を立ち上げ、多くの仲間や居場所を得ることができた鈴木さんは、「家庭内で罵倒されている人は我慢強く耐える力がある」「話を聞いてもらえずに悩んでいる人は他人を信じる力がある」など、社会からの疎外感に悩み自分を責めて傷つけている人たちにも環境に耐える底力や良いところがあると気づきました。

リボンの会として継続した活動を行うなか、2016年には愛媛県摂食障害支援機構を創立し、年間100人以上の摂食障がい者と交流する内に、幼いころからDVを見て育ったために、自分の存在を否定したり、自信を持たなかったりしている多くの人たちに出会いました。

例えば家庭内で自分がDVを受けていなくても、誰の身にも起こる可能性がある以上全く関わりがないことだとは言えないため、DVの専門家ではなくとも一人の人間としてできることがあるのだと締めくくられ、会場からは大きな拍手が送られました。



【当日の様子】



【映画】

はじまりの街

La Vita Possibile あ

【あらすじ】

夫のDVから逃れ、身一つでトリノにやってきた母アンナと息子ヴァレリオ。見知らぬ土地で、今までどおりにはいかないもどかしい日々が始まった。仕事探しに焦るアンナと、孤独な時間を過ごすヴァレリオはすれ違い、溝は深まるばかり。しかし、そんな二人の周りには、「ずっといたらいい」と笑顔で二人を受け入れる友人や、気にかけてくれ、助けてくれる近所のビストロオーナーがいた。

困難や生きづらさを感じながらも、周囲の人々の温かな心に支えられ、人生の再スタートに向けて歩もうとする親子の物語…



大きな世界の片隅に、新たな一歩を踏み出す一組の親子と、彼らを見守る心優しい人たちがいる。北イタリアの美しい街トリノを舞台に、女の友情と人生の可能性を調い上げる感動作。



【アンケート】

悩み、苦しみながらも前向きに生きている姿に励まされました。(40代・男性)

生きづらさを個人の責任にしない世の中になることを心から願っています。(40代・女性)

ミニトークからは、様々な取り組みやその環境が愛媛にあるということ学びました。また、映画は未来の明るさを感じさせるものでした。(50代・男性)

講演が素晴らしかったです。専門家でないことによる親近感の一方で、実体験による話の内容は迫力がありませんでした。映画はDVから逃れて生きることの難しさ、その一方で応援してくれる人々の温かさ、子どもの心の機微の大変さ等色々と考えさせられました。(50代・男性)

鈴木さんの活動の内容がよくわかりました。知らなかったのが勉強になりました。(50代・女性)

映画からは、母子家庭における子育ての大変さや、母親の賢明さと周囲の助けの大切さを学びました。(60代・男性)

ミニトークが聴けて本当に良かったです。摂食障害の体験者しかわからない心や気持ち伝わってくるようでした。(50代・女性)

摂食障害の方が訪ねていける事業所があることを知りませんでした。近くにSOSを足している人がいたら教えてあげたいです。(60代・女性)

体験に基づいたミニトークがよかったです。支えあうことの大切さや、支えてくれる人が周りにいることがわかりました。(60代・女性)

生きづらさについて共感しました。人に優しい人間になりたいと思います。(60代・女性)